

言語の他者性について

岩 佐 厚太郎

1. 「恐るべき対応」

言語は人間を他の生物から分ける第一の指標である。その言語についての思索は、したがって人間の歴史と同じくらい古いにちがいない。にもかかわらず、「言語を純粋な客体の状態に引きおろそうとするこの水平化」¹とともに、言語学が科学として自立し始めたのは、ようやく19世紀になってからだとされる。とりわけサンスクリットの発見は大きな意味を持っていた。自分たちの言語を相対化して見る視点をヨーロッパに与えたからだ。

だが科学的な言語観といえども、言語を自然物として見る見方から解放されていたわけではなかった。それどころか、それは逆に言語を人間の外にある客観的な実在物として見る態度を助長した。いかなる科学も科学である以上、おのれの研究対象を「純粋な客体」として見なければ、成り立たないからだ。20世紀に入って、ソシュールから言語学が始まったとされるのは、彼がそうした「科学的な」言語観を根底から覆したからだ。

他の領域では、諸事物、与えられた諸対象があり、続いてそれをさまざまな視点から自由に考察することができる。

この領域ではまず、正しいにせよ、間違っているにせよ、単にいくつかの視点が、それを用いて事物が二次的に作り出されるいくつかの視点だけがある。²

¹ Foucault: *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*, Gallimard 1966, p. 307.

² Saussure: *Écrits de linguistique générale*, Gallimard 2002, p. 200.

研究者に先だって、対象がその外にあるのではなく、逆に研究者の視点が研究すべき対象を作り出す、ソシュールにとって恣意性が言語学の第一原理になった理由はここにあった。だが、言語学が言語を物という客体的な対象性から解放したとすれば、同時にそれは、音であるという自分自身の半身からも自分を解放したのでなければならない。なぜなら現実の会話の中で雑多な変異にさらされている音もまた客観的な実在物であり、言語学の対象たりえない余計者であるからだ。だからこそ新しい言語学はまず最初に、個々の音とは区別された音素の体系的な構造研究を手がけたのだ。だが、そうした流れに先鞭をつけたソシュール自身はどう考えていたのだろうか。彼はラングの言語学とパロールの言語学とを原理的に峻別したうえで、つぎのように語る。

以上が、ランゲージュの理論をつくろうと試みるや否や出会うことになる最初の分岐点である。二つの道のどちらかを選ばなければならない。二つの道を同時にたどることはできない。べつべつにたどらなければならない。³

こう断ったうえで、ソシュールがまずラングの言語学の確立へと進んでいったことは周知のとおりである。ところが、パロールとラングのそれぞれの言語学を究明し尽くすことで、一般言語学全体を構築することになるはずであったにもかかわらず、パロールの言語学に入る直前に講義は中断され、そのままソシュールは深い沈黙に入っていくことになる。したがって彼がパロールの言語学、すなわち個人の発話行為に関わる理論について、自身の体系の中でどのような位置づけを与えようとしていたのかは正確には分からない。分かっているのは、それが彼にとって厄介な問題であったということである。

ところで、音が単純な一つの物であると認めるとしよう。ランゲージュ

³ Saussure: *Cours de linguistique générale*, Payot 1981, p. 38.

をつくっているのはこれなのか？いや、これは単に思考の道具にすぎず、それ自体で存在するのではない。そこで、新たな恐るべき対応が生じる。すなわち、聴取と発声の複合体である音は、他方で、観念と一緒にになると、生理的・精神的な複合体を形成してしまう。⁴

音が単に「聴取と発声の複合体」であるだけでも困ったことである。なぜなら発声時の音響とその心的な把握である聴覚上の印象とは、同じ次元にいないにもかかわらず複合しているからだ。同じように、音は観念とともにある以上、一方ではなんらかの意味で精神的な存在であるのに、他方ではあくまでも生理的な諸機能と複合している。ようするに音は物の側にあるのにそれを裏切って心の側についており、心の側にあるのにそれを裏切って物の側についている。ソシュールはそれを「恐るべき対応 redoutable correspondance」だと困惑しているのだ。

物体と精神とを一刀両断した結果、松果腺という苦しい説明をしなくてはならなくなったデカルトを持ち出すまでもなく、言語を物から解放してしまえば、音という物体を経由して実現されるしかないパロールについては、一貫した説明が困難になる。それは当然の成り行きである。では、ソシュールはそこをどう乗り切ったのか。

われわれによれば、こうしたすべての困難に対する解決は一つしかない。すなわち、なによりもまずラングの地面に腰をすえて、これをランゲージュのほかのすべての現われの規範とみなさなければならない。⁵（傍線は原文の強調箇所）

こう宣言してソシュールは予定通りラングの言語学を展開していく。ラング

⁴ Ibid., p. 24.

⁵ Ibid., p. 25.

とは「パロールの実践によって同一社会に属する諸主体のうちに貯蔵された財宝」⁶であり、「それは記号体系である。そこにあるものは、本質上、意味と聴覚映像との結合だけである。そして記号のこの二つの部分は同様に心的である。」⁷

パロールは泣いて斬られた馬謖である。講義を進めるために、ソシュールはとりあえず言語からパロールを切り離し、心的なラングの城に閉じこもるしかなかった。そうすれば、物と心に引き裂かれた「恐るべき対応」はひとまず回避されるだろう。あとは「意味」すなわちシニフィエと、「聴覚映像」すなわちシニフィアンとの上に、思うように言語学を構築するだけであり、そうして残されたものが現存する『一般言語学講義』である。だがそれは、パロールと直面することを先送りすることではかない。そして、その先送りは最後まで先送りのままであった。すでに述べたように、最後に予定されていたパロールの言語学は、結局、最後になっても語られることはなかった。

2. 切り捨てられたパロール

しかしソシュールを継いだ者たちは、継いだ者たちが往々にしてそうであるように、徹底的に割り切っていた。たとえばヤコブソン。彼は音響学について、「個々の音の顕微鏡的イメージを驚くほどの精密さで示すことができるが、しかしそのイメージを解釈することもできず、まるで未知の言語の象形文字でもあるかのように、それ自身のデータを使うこともできない」⁸と批判したうえで、つぎのように音韻論の台頭を宣言する。

人は聞いてもらうため話す、とわれわれは述べた。さらに、人は理解されるために聞いてもらおうとする、と付け加えなければならない。これ

⁶ Ibid., p. 30.

⁷ Ibid., p. 32.

⁸ Jakobson: *Six leçons sur le son et le sens*, Éditions de Minuit 1976, p. 36.

が、発声行為から本来の意味の音へ、音から意味への道である！ われわれはここで音声学の領域、すなわち音をもっぱら運動的、音響的側面において研究する学問を離れ、新しい領域、すなわちその言語的側面において言語音を研究する音韻論の領域に近づくことになる。⁹（傍線は原文の強調箇所）

ここまではラングの言語学を講義するにあたってソシュールが述べていたこととまったく同じである。すなわち科学として出発したいのなら、言語学は混沌たる物（音）の連鎖に見切りをつけて、聞いてもらうため、理解してもらうための音と意味、ようするに記号とその体系であるラングに立脚するしかないと言っているのだ。問題は、とうとうと音韻論を述べた最後に彼が語った言葉である。

音素は音と同一でもなければ、音に対して外在的でもなく、必然的に音のうちに存在し、本質的に音に属し、音と重なり合った状態にある。つまり、それは変異のうちにある不変異体なのである。¹⁰

ヤコブソンは自分がラングから抽出した音素は同時に、音そのものの客観的な構造であると語る。それは解決不能と思われる「恐るべき対応」だから、やむをえずいったん迂回して、シニフィアンとシニフィエという心的なレベルで話を進めようというのが、ソシュールの苦渋の選択であった。しかし言語学者であるヤコブソンはソシュールがなぜそんな回り道をするのか分らない。すべての経験科学は程度の差こそあれ、自分は物の秩序を客観的に観察していると考えてやってきたではないか。

トワデルが1935年にもっとも効果的に手がけ、多くの学者の論文に

⁹ Ibid., p. 37.

¹⁰ Ibid., p. 94.

潜在的に染みこんでいる説によれば、音素は抽象的な仮構の単位である。これが、どのような科学的な概念も仮構の構成物であるということ以外の何ものをも意味しないのである限り、そのような哲学的態度は音素分析に何の影響も及ぼしえない。¹¹

ヤコブソンの主張は正しい。もし音素が「仮構の構成物」として非難されるなら、あらゆる科学も同様に非難されるべきであり、結果として深刻な懐疑論に陥ることになろう。たしかに科学の側から、「仮構の構成物」であると同時に客観的な実在自体の把握であるという自分自身の二面性について、納得のいく釈明が与えられたことはない。しかしそれはギリシアの昔から続くアポリアであって、そんなスコラスティックな議論に加担する義理は科学にはない。そんなものは哲学にでも任せておいて、実験と観察によってねばり強く仮説を検証していけば、おのずから客観的な対象の秩序と法則に至るはずである。であるならラングから抽出された音素もまた、「必然的に音のうちに存在し、本質的に音に属し、音と重なり合った状態にある」と仮定していけないわけではない、ヤコブソンは素朴にそう信じている。おそらくその信念がなければ、どんな科学も成り立たないだろう。

だが、何かを信じるということは、何かを見捨てるということである。ヤコブソンとソシュールとの違いは、ヤコブソンには自分が何かを見捨てているという自覚はなかったが、ソシュールは決してそうではなかったという点にあるのだ。

パロールによって、ラングと呼ばれる社会的なしきたりを用いて、その能力を実現しようとする個人の行為が表わされる。パロールのなかには、社会的なしきたりによって承認されたものの実現という観念がある。¹²

¹¹ Jakobson and Halle: *Fundamentals of language*, Mouton 1956, p 13.

¹² Saussure: *Deuxième cours de linguistique générale*, Pergamon 1997, p. 4.

この引用は、彼の講義を聴いたリートランジェの、第二回講義のノートからのものである。もともと「心的」な存在であったラングは、ここでは同時に「社会的なしきたり」である。物としての客体性に代わって、社会制度としての客観性に、研究対象としてのラングの適格性を見出しているのだ。反対に、パロールは単に「個人の行為」である。研究対象としての身分が最初から違っている。ところが同じリートランジェによる、1年数ヶ月前に始められていた第一回講義のノートには、パロールについて考察されたなかに、短い注目すべきつぎのような記述がある。

この二つの領域のうち、パロールの領域は優れて社会的であり、他方[ラング]はまったく完全に個人的である。ラングは個人の貯蔵庫である。ラングの中に、つまり頭の中に入っているすべてのものは、個人的である。¹³

ラングとパロールの関係が、第二回講義とは明らかに逆になっている。もともとは、ラングは「まったく完全に」個人的で、社会的なのはむしろパロールの方だったのだ。この逆転は何なのか。「個人の貯蔵庫」でしかないラングが、いったいなんの権利があって、突然「社会的なしきたり」と見なされるのか。はっきりしていることは、逆転以降、ラングは第三回講義まで語られ続けたが、パロールは最後まで語られなかったということだ。だとすればそれは、パロールについて語らないこと、すなわちパロールを排除することが、ラングの言語学を可能にしているという意味ではないのか。それをいやでも意識しないではいられなかったからこそソシュールは、講義が終わるや否や、「自分の講義の下書きとして、その日その日に書いた走り書きの草稿を、次々と破り捨てていた！」¹⁴ と、死後2年半たって出版された『一般言語学講義』の編者たちによって明かされる羽目になっ

¹³ Saussure: *Premier cours de linguistique générale*, Pergamon 1996, p. 65.

¹⁴ Saussure(1981), p. 7.

たのではないか。彼はそうすることで、パロールを延々と先送りしている自分自身の講義を、毎回告発していたのだ。ヤコブソンには、そんなソシユールの苦悩は分からない。いやヤコブソンだけではない。意に反して残されてしまった彼の一般言語学を、見事に継承していったすべての有能なものたちにとって、分からない。

3. 切り捨てられたエクト

オースティンの言語行為論を持ち出すまでもなく、パロールを扱った言語研究は、実はいくらでもある。だがそれらは、なんらかの意味ですでに他者と共有されたラングを前提にしており、パロールとはそのラングの運用であり、それをを用いた表現であり、伝達であるにすぎない。それにどのような問題があるのかを研究することに意味がないとはいわない。ただそれを問題にするのなら、その前にまずラング抜きでパロールそれ自体について語ることが先決ではないか。たしかに、ラングがなければいかなるパロールもありえない。しかし我々はだれも、始めからラングを持って生れて来たりはしないのだ。だから、その我々をいまのラングへと導いた、ラング以前のパロールがあったはずである。そんなものは言語学のフィールドではない、ラカンあたりの精神分析に任せておけばいいと言うのなら、それは言語学の責任放棄ではないか。

精神分析が、言葉を習得する前の人間について、あえて言葉を用いて語ろうとするのは、そうしなければ目の前の一人の患者について、なにも語れないからだ。だとするなら、言語学もまた、ラング以前のパロールについてラングを用いて語らなければ、いま起こっている一つ一つの言語現象について、なにも語れないのではないか。ラングはパロールを前提しパロールはラングを前提する、それは相互依存的な循環である、などと語る者は、少なくともソシユールとは無縁である。ソシユールはあれほどラングを語ったあとでもなお、パロールについて語ることはなかった。

ソシユールを先に進めることなく、ソシユールに踏みとどまることが

大切なのだ。たとえばここであえて、ソシユールの最大の継承者である構造主義の陣営から、「コギトに囚われている *captif de son Cogito*」¹⁵ と批判されて、引導を渡されたとされるサルトルの言語論を振り返るのも意味のあることかもしれない。それは、彼の主著である『存在と無』の第三部にあたる「対他存在」の第三章、「他者との具体的な諸関係」のなかにある。すなわち第一節の「他者に対する第一の態度——愛、言語、マゾヒズム」と題されたごく短い言語論である。それは彼が、対自と並んで人間存在の根源的な構造である「対他存在 *être-pour-autrui*」を分析するなかで導かれたものである。

言語とは、根源的にいって、ひとつの対自がおのれの「対他存在」について為しうる体験である。¹⁶

それ[言語]は、根源的に「対他存在」である。すなわちそれは、一つの主観性が他者にとって対象として体験されるという事実である。¹⁷（傍線は原文の強調箇所）

ここで「対他存在」とは話し手の存在論的な規定であり、「一つの主観性」とはその話し手の主観性、要するに「対自」を意味する。それゆえ、「他者」とは聞き手 *sujet écoutant* のことである。言語は、話し手と聞き手のそれぞれにおける「対他存在」の体験であるが、それは話し手のパロール（発声）が、聞き手のエクート *écoute*（聴取）を通過することによって、話し手の内的な主観性の顕現として改めて開示される体験である。サルトルの言語論が独創的なのは、彼が言語を為手である話し手の側からではなく、受け手である聞き手の側からとらえている点にある。なぜなら言語は対他存在であり、

¹⁵ Lévi-Strauss: *La Pensée sauvage*, Plon 1962, p. 330.

¹⁶ Sartre: *L'être et le néant: essai d'ontologie phénoménologique*, Gallimard 1973, p. 440.

¹⁷ Ibid., p. 441.

対他存在とは、「他者の自由のうちに、他者の自由によって書かれるような私の存在」¹⁸ だからである。

他者は、言語にその意味を与える者として、つねにそこに現前しており、つねにそこに体験される。¹⁹

脱自的な超越である話し手の主観性は、元来、決して物のように対象化されることはない。しかし聞き手にとっては、話し手の主観性が対象として、あたかも物のように凝固して体験されるのだ。その凝固した主観性が「対他存在」であり、言語という事実なのだ。話し手が、頭のなかのコード（ラング）を利用して有意味な音の連鎖をつくり、それを外にいる聞き手に伝達するといった発想をする余地はここにはない。なぜなら、話し手の音に意味を与えるのは他者＝聞き手だからだ。話し手である私は、そもそも「私の意味しようとしていることをはたして私が意味しているかどうか、正確に知ることができないし、はたして私が有意味であるかどうかということさえも、正確に知ることができない。」²⁰ それは、言語が対他存在であることから必然的に導かれる結論である。正確に知っているのは、「黙ったまま私に耳を傾ける他者」²¹、すなわち聞き手だけである。話し手の発した音の連鎖に意味を与えるのは、したがって言語活動の真の主体というべき者は、聞く以外に何もしない、完全に受け身である聞き手にほかならない。エクートという立場が、彼にその特権的な役割を与えるのだ。

第一回講義でソシュールが述べたように、ラングではなくパロールこそが社会的であるとするなら、それは、パロールが他者のエクートと現実的な世界で生身の諸関係を生きるからである。言語記号は音（シニフィアン）と意味（シニフィエ）の結合である前に、パロールとエクートの結合なの

¹⁸ Ibid., p. 320.

¹⁹ Ibid., p. 441.

²⁰ Ibid., p. 441.

²¹ Ibid., p. 442.

だ。よく知られているように、言語は厳密には記号ではない。それは他の記号とは違って、言語はメタレベルでその意味を確定できないからである。ではなぜ確定できないのかといえば、サルトルならつぎのように言うのではなかろうか、すなわち、語の意味はまるで羞恥の体験のように、他者から、予測も制御も不可能な外部から、やって来るからだ、と。

問題は、そうであるにもかかわらず、すべての言語記号が音と意味との緊密不可分な結合として話し手のだれにとっても、エクト抜きで実感されるということ、そのことはだれにとっても疑いようがないように見えるということ、にあるのだ。しかし、それこそがおそらく、我々が我々自身であるために、我々自身にもたらしめている最大の錯覚である。言語学はラングを実体として立てることで、その錯覚があたかも錯覚ではないかのような錯覚をふりまいてきた。その結果、真に社会的なパロールが切り捨てられて、話し手個人の頭のなかにしかないラングを社会的に自立した制度的共有物とみなす転倒した飛躍（ソシュール）が生じ、その飛躍がこんどは、ラングの観念的な特性を自然物（音）の実在的な特性であるとみなす二次転倒（ヤコブソン）を呼び込んでしまったのだ。

切り捨てられたものは、第一義的には、他者であり、そのエクトだったのだ。エクトを切り捨て、さらにパロールを切り捨てる。ようするに我々はもはやだれも聞こうとはしないし、だれも話そうとはしないのだ。なぜなら我々は、聞くときも話すときも、まずラングという幽霊のような虚構を共有のコードとして「読む」ことに媒介されてしまうからだ。読まずに聞くことも、読まずに話すことも、もはや我々にはできない。コミュニケーションとはその哀れな不具性の別名にすぎないのだ。